

優秀賞

曇り空でもバトンはつなぐ

流通経済大学付属柏高等学校 1年 山室 智咲

「曇りつつ気分下がるよな。」

前を歩く四人組の男子達の何気ない会話に心の中で深く共感しながら足早にウォーミングアップエリアへと向かう。いつも通り四人でウォーミングアップをしてバトンパスを合わせる。感触としては悪くない。昨日の夜、入念なストレッチをしたお陰で体のコンディションもばつちりだ。それなのに私の周りの空気は重く淀んで見える。「悔しい、悔しい、悔しい。」市総体という中学最後の晴れ舞台を前に、今日まで閉じ込めてきた言葉が思わず溢れ出してしまふ。

リレーに全てをかけてきた。個人種目の変更までしたのに、今年の春にしたけがの影響で調子があがらず、県総体では補欠止まり。市総体では三年生だからという理由でリレーメンバーに選ばれた。覚悟はしてきたつもりだが、本番を目の前にすると自分が情けなくて居ても立ってもいられなくなる。

レース直前の待機中、リレーメンバーのうちの一人が何か言いたげな様子で私に向かって歩いて来た。そして私の目をじつとにらみつけて、

「私たちが最後までつなぐから！」

ただそれだけ言い残してスタスタと去って行ってしまった。私はその一瞬の出来事に驚きが隠せず少しの間棒立ち状態だった。そして気がついた。リレーは私一人の孤独な戦いなんかじゃない。喜びも悲しみも全てを一つのバトンに込めて四人で分かち合うチーム戦だ。悔しくたつて良いじゃない。私にはこの思いを共に背負って次へとつないでくれる仲間がいるのだから。

研ぎ澄まされた感覚でピストルの音を受けスターティングブロックを蹴る。無我夢中で走っていた私はその後のことをよく覚えていない。ただ、はつきりと覚えていることがあるとすれば、四人で肩を並べて表彰台の一番上にあがったとき、何気なく「曇りも悪くないかもな」と思ったことくらいだ。